

本日は、ご参加いただきありがとうございます

## ○本日のテーマ

「美術史を根本から破壊した男・マルセル=デュシャンとは何者か?」です。

○簡単な紹介をお願いします。

○自己紹介 場所など

○参加の興味・関心などの根拠などお聞かせください。



# マルセル・デュシャンの足跡 (1887年 - 1968年・1歳~81歳)



①

## 誕生から 青年期

20~24歳

1911頃まで

- ・1887年、仏・ノルマンディー地方セヌ＝マリティーム県ブランヴィル＝クレヴォンの裕福な家庭に生まれる。
- ・兄弟それぞれジャック・ヴィヨン、レーモン・デュシャン＝ヴィヨンの名で、美術家として知られている。
- ・1904年23歳、パリに出てアカデミー・ジュリアンで絵画を学んだ。
- ・1911年24歳・印象派やフォーヴィスム風の作品や『階段を降りる裸体』ピカピアの影響を受ける
- ・「チェス・ゲーム」油彩画

②

## アメリカで レディメイド 大ガラス制作

24~33歳

1913~1917

- ・24歳「汽車の中で悲しめる青年」
- ・26歳・ニューヨークのアーモリー・ショーに「階段を降りる裸体No.2」「自転車の車輪」展示。「三つの停止原器」
- ・28歳N.Yでアトリエを構える。
- ・30歳『泉』制作アンデパンダン展出品・「エナメルで塗られたアポリネール」制作
- ・36歳『大ガラス』を制作
- ・32歳マン・レイと親交を結ぶ。『L.H.O.O.Q.』『パリの空気50cc』『Fresh Widow』制作
- ・33歳「埃の培養」

③

## 視覚体験の 実験

34~47歳

1920~1934

- ・43歳までにデュシャンは視覚体験の実験「回転レリーフ」を始め、錯視だけでなくアートとデザインの相互作用も探究
- ・47歳《グリーンボックス》制作
- ・48歳1935年「ロト・レリーフ」
- ・1930年代までに、デュシャンは視覚体験の実験を始め、錯視だけでなくアートとデザインの相互作用も探究

④

## アートと チェス生活

47歳~59歳

1937 - 1946

- ・48歳・「ロトレリーフ」1935
- ・49歳・「飛び出すハート1936」
- ・54歳・複製ミニチア69点を「革製トランクに収録」する。
- ・56歳「ポケットチェスセット」制作
- 「革とセルロイド」制作
- ・59歳「トランクの中の箱」
- ・60歳「お触りください」1947

⑤

## 遺作

「与えられたとせよ

1. 落ちる水
2. 照明用ガス」

59歳~81歳

1946- 1968

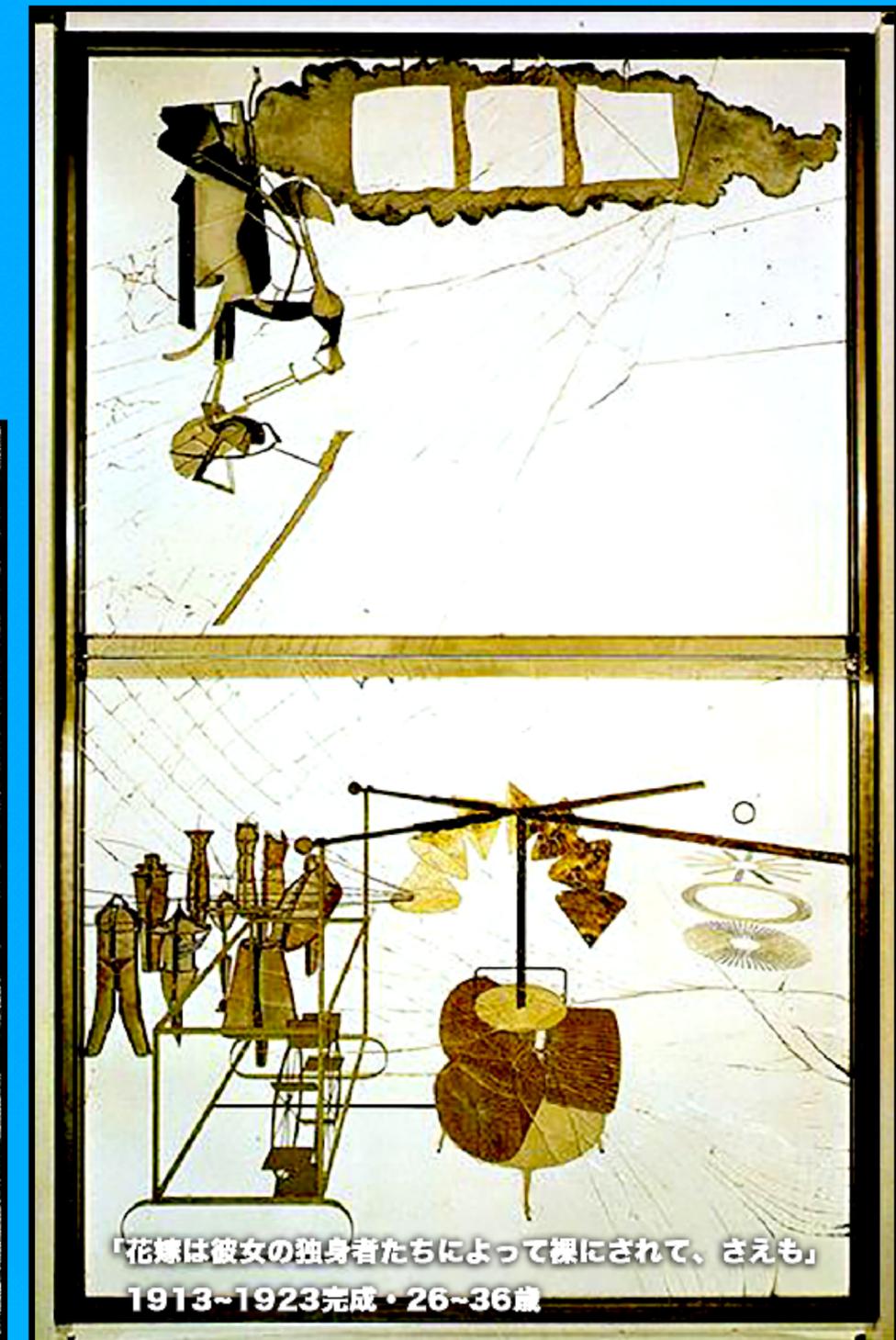
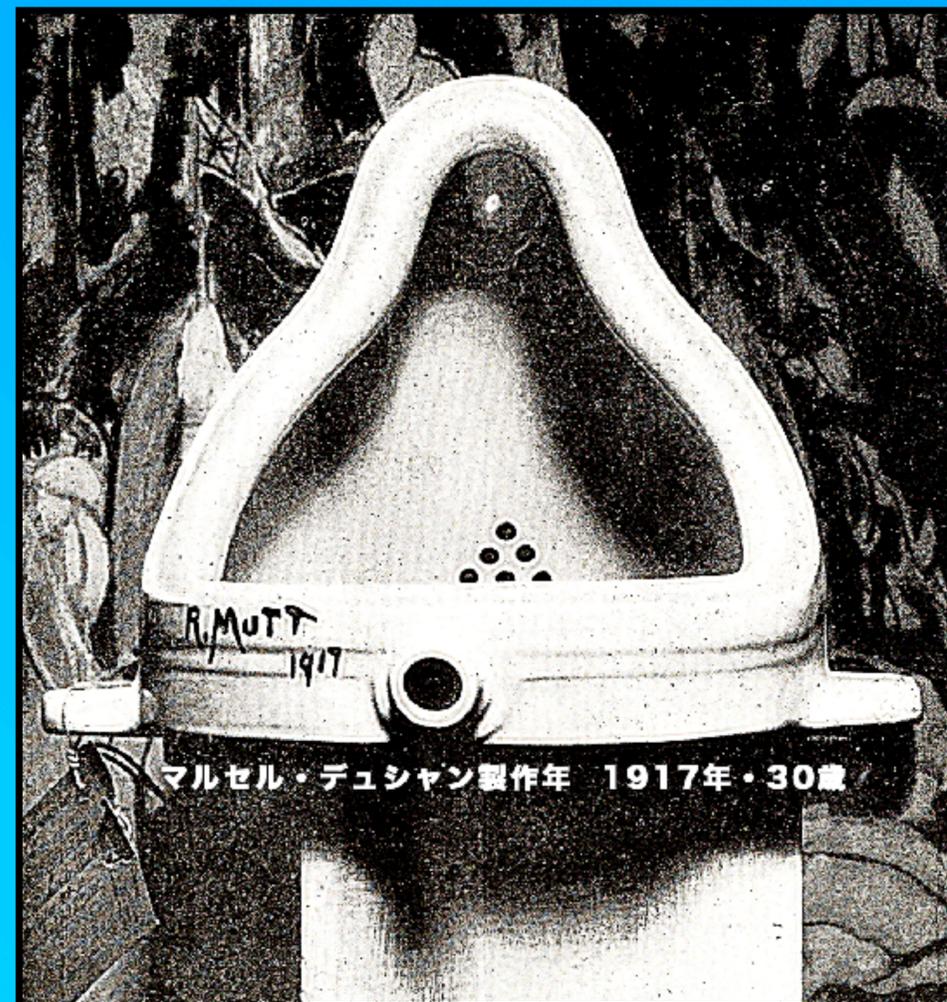
- ・63歳「メスのイチジクの葉」
- ・64歳・オブジェ・ダールの制作1951年
- ・66歳・「パスウッド湾の月光」
- ・78歳「ドンペリニヨンの箱」の制作
- ・1948~49年61~62歳・「与えられたとせよ1.落ちる水2.照明用ガスのための習作」
- ・1968年・「与えられたとせよ1.落ちる水2.照明用ガスのための作品完成」未発表・死後数年にフィラデルフィア美術館で初公開
- ・81歳・死去

# ①-1・レディメイドの発明

1887(1歳)~~1968年(81歳)

○マルセル・デュシャンとは一体なんなんだ・・・日本でも実物を拝める機会は本当に少ない。作品図版をどこかで目にしたことがある程度が関の山。でも現代アートを理解する上で、21世紀の文化を生きる上で、知っておくべき人物である。**工業製品がそのまま芸術作品(レディ・メイド)になる方法論を編み出した**かと思えば、巨大なガラスに謎の図像を描いて「**花嫁は彼女の独身者たちによって裸にされて、さえも**」という謎のタイトルをつけた作品「**未完成のまま**」放置した。

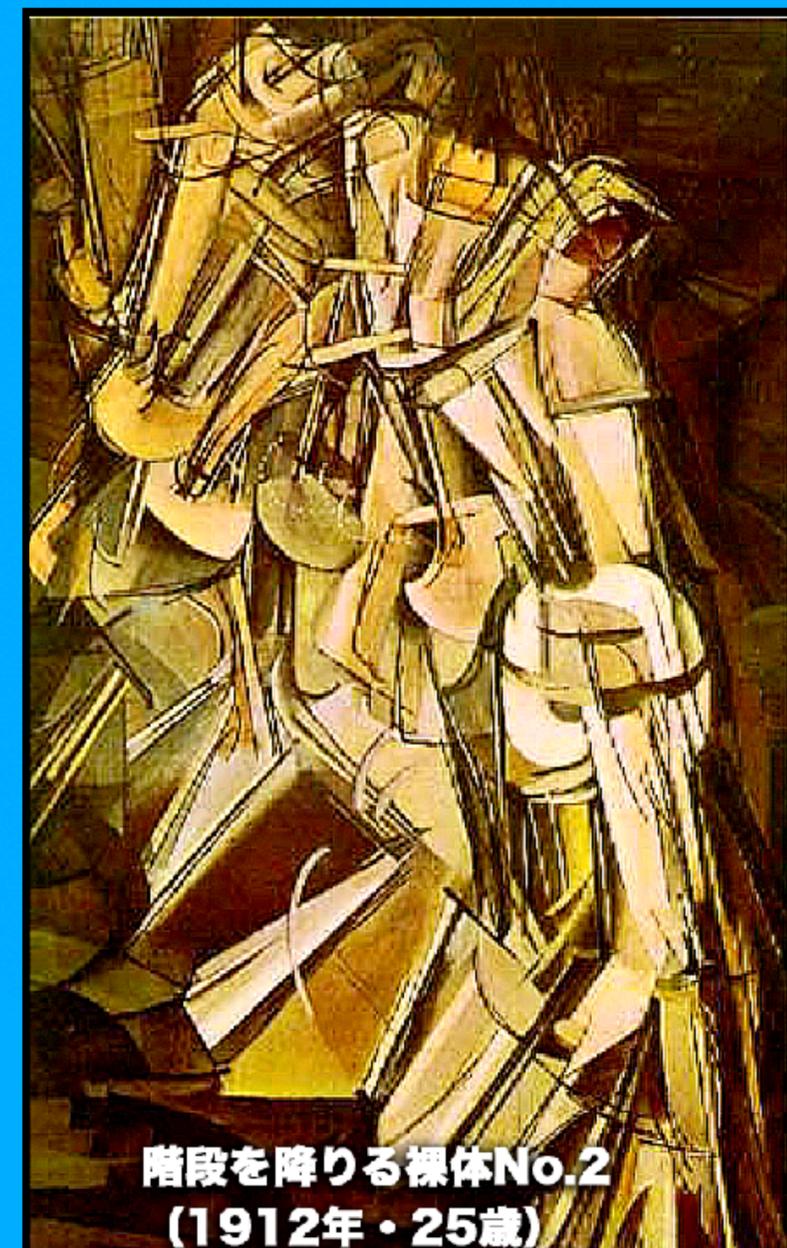
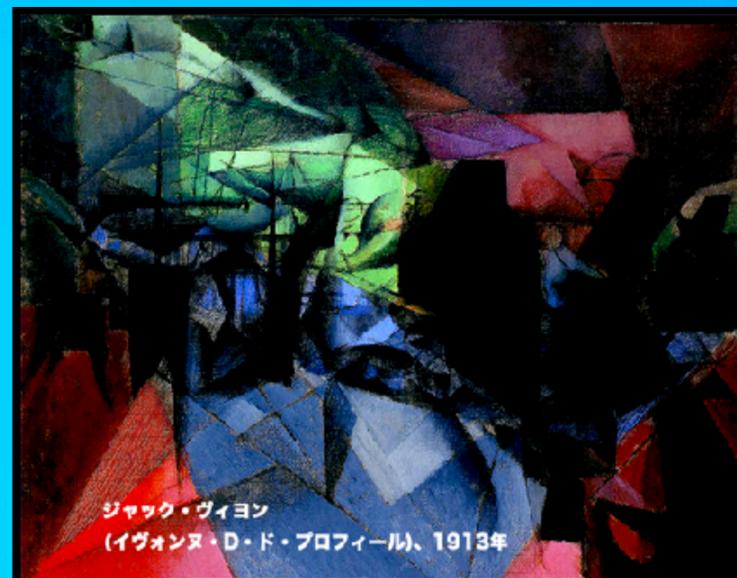
○生い立ち・・・アンリ=ロベール=マルセル・デュシャンは1887年**フランス北部ノルマンディ地方**の小さな村**ブランヴィル=シュル=クルヴォン**で生まれた。父はイジドル・デュシャン、母はマリー=カロリーヌ=ルーシーの間に生まれる。マルセルの兄が二人、長兄ガストンのちの**画家ジャック・ヴィヨン**、次兄レイモン後の**彫刻家レイモン・デュシャン**である。



# ①-2・生い立ちとその後作品

1936(8歳)~1948年(20歳)

○生い立ち・・・アンリ=ロベール=マルセル・デュシャンは1887年フランス北部ノルマンディ地方の小さな村ブランヴィル=シュル=クルヴォンで生まれた。父はイジドール・デュシャン、母はマリー=カロリーヌ=ルーシーの間に生まれる。父親は裕福な公証人で、母親は画家、マルセルの兄が二人、長兄ガストンのちの画家ジャック・ヴィヨン、次兄レイモン後の彫刻家レイモン・デュシャンである。



# ①-3・画家マルセル・デュシャン誕生

1904(17歳)~1910年(23歳)

## 絵画の歴史を泳いで渡る

○1904年17歳の《マルセル・ルフランソワの肖像》では、ルネサンス期の画家たちのテクニクの再現を試みる一方で、1908年頃21歳までは印象派あるいは緩やかな点描派的な画風が続いた。1910年23歳にはセザンヌへの意識が前面に出るようになり、画題も室内の裸婦、肖像、家族の姿へと一変する。なかでも1910年に描かれた2枚の作品《画家の父の肖像》と《チェス・ゲーム》は、表現方法と主題ともにデュシャンによるセザンヌの直接的な咀嚼が見て取れる。ゴーギャンへの関心が、象徴派(サンボリズム)やキリスト教的伝統と融合した結果、《楽園》(1910~11年)や《洗礼》(1911年)といった作品に見られる不思議な裸体像群へと結実していくことになる。

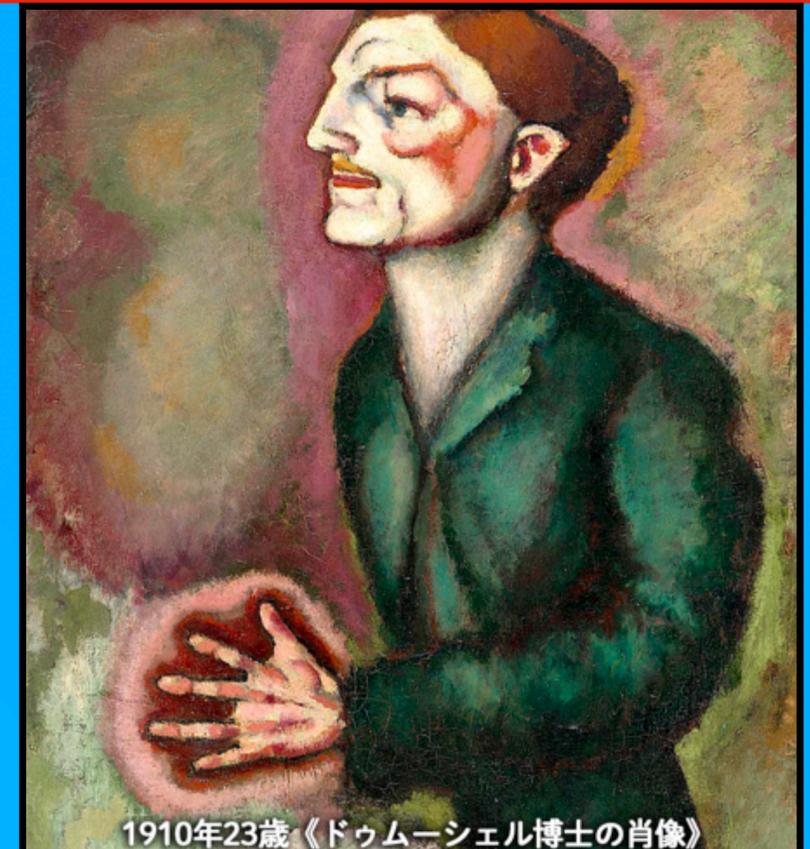
○デュシャンは、(ルネサンス→)印象派→ポスト印象派(セザンヌ、ゴーギャン)→象徴派野獣派と19世紀後半から直近の時代までの油絵の歴史を「エクササイズ」と称して泳ぎ切ろうとしたのである。この時期の彼の油絵で興味深い作例は、1910年23歳の《ドゥムーシェル博士の肖像》であろう。彼の友人であったドゥムーシェル博士のプロフィール肖像である。この絵画においてとりわけ注目すべきは、胸の前で広げた左手の表現だ。あごを少し上げて遠くを見つめている博士の広げた手の回りが、黄色く光り輝いているように描かれている。



マルセル・ルフランソワの肖像  
1904・17歳



「チェス・ゲーム」1910年23歳  
(印象画風か点描画風か)



1910年23歳《ドゥムーシェル博士の肖像》

# ①-4・キュビズムへの遅れを挽回する

1911(24歳)~1912年(25歳)

○デュシャンがキュビズム的手法を初めて試みた作品は**1911年の《ソナタ》**24歳だと言われる。画面に登場するのは、デュシャン家の女性4人。2人の妹イヴォンヌとマグドレーヌが楽器を演奏し、ジュザンヌはうつむき加減で肘をついて読書をしているようである。その**三姉妹の姿を見守る母を含めた4人は、大きな菱形を形成**する（あるいは4人の頭の位置が十字を形成するとも言える）ように画面に配置され、中央の人物群は堅固に構成されているが、前景の人物と背景の室内空間との関係がまだうまく処理できておらず、ぎこちなさが残る。

○デュシャンはキュビズムも過去の様式として絵画の練習材料と考えていた、と述べた。ビュトー・グループの画家たちが生真面目にキュビズムを解釈して発展させようとしたのに対し、デュシャンはあくまでも自己流に、キュビズムのスタイルを通じて表現可能ないくつかのポイントを持ち込もうとした。驚くべきことは、キュビズム的なアプローチを開始した1911年のうちにその実験がすぐさま開始されることである。デュシャンが独自に表現しようとしたポイントのひとつは、**《チェス・プレイヤーの肖像》と《ずたずたに裂かれたイヴォンヌとマグドレーヌ》**の2作品に顕著に現れている。



1911年の《ソナタ》24歳



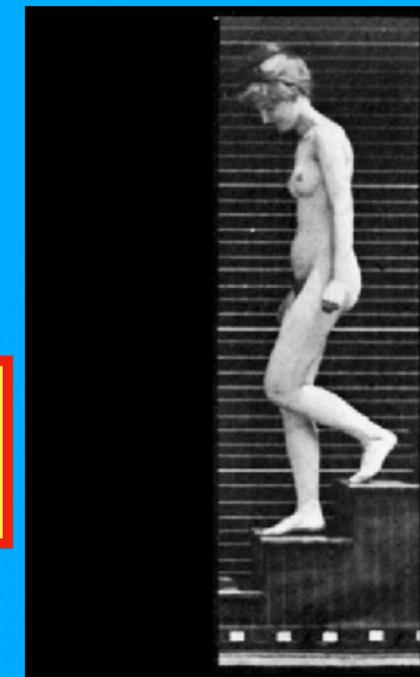
ずたずたに裂かれたイヴォンヌとマグドレーヌ  
1911年24歳



《チェス・プレイヤーの肖像》1911年24歳

# ①-5・階段を降りる裸体へ至る道

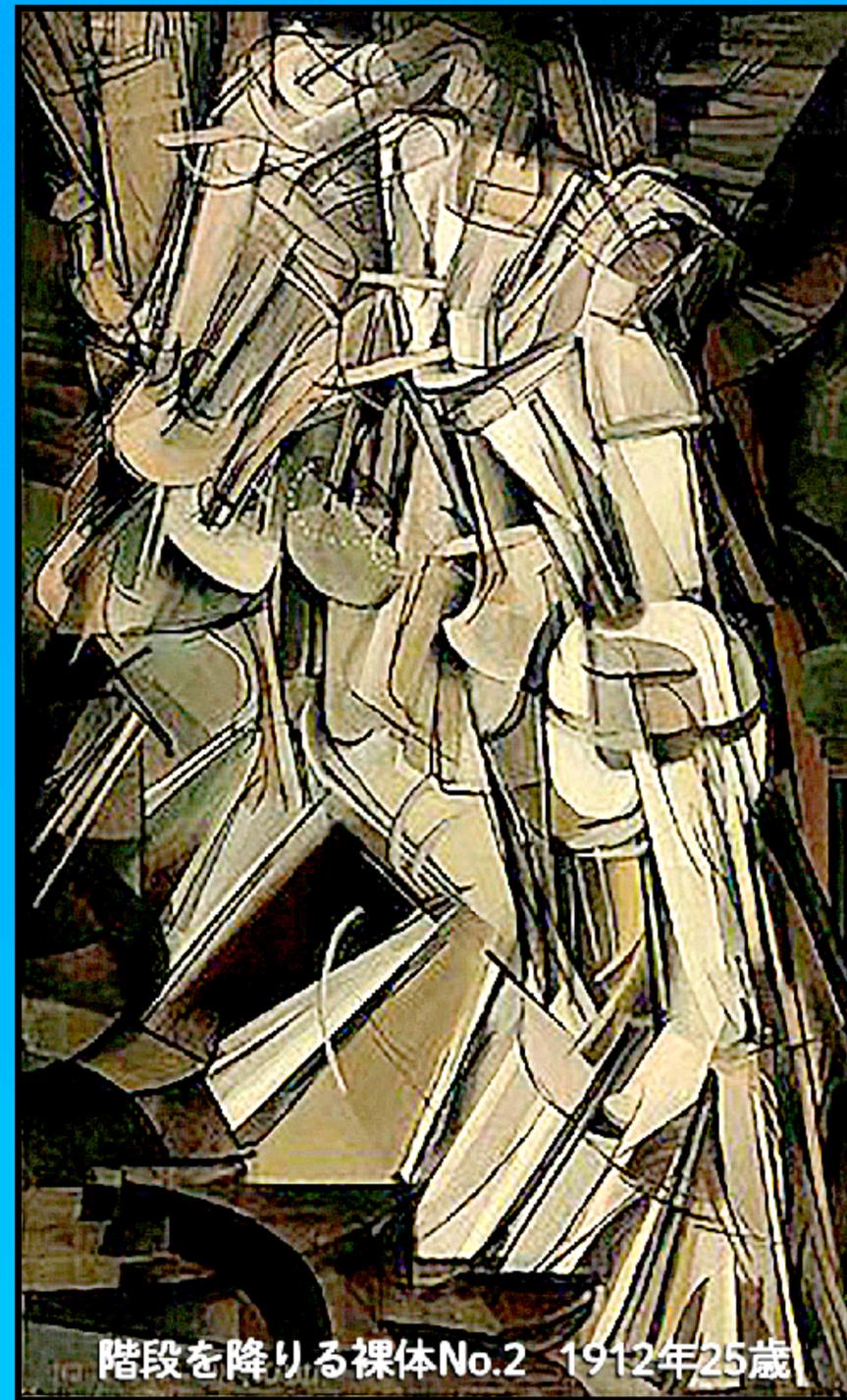
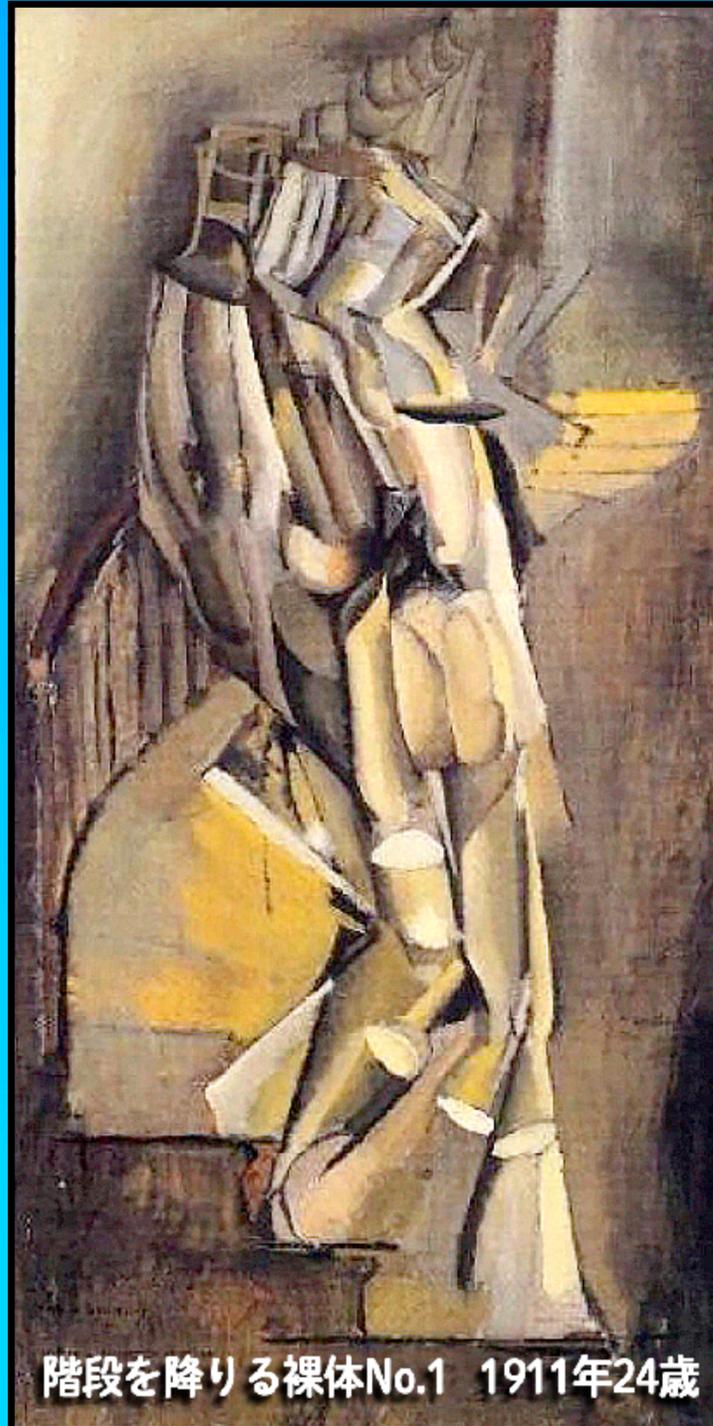
1911(24歳)~1912年(25歳)



## 連続写真と運動表現

### ○ 《階段を降りる裸体No.1》

は、クロノフォトグラフに基づく三作品のうちおそらく最初に試みられたもので、背景の螺旋階段と前景の人物の接点は階段の最後の三段に限定され、人物像は横にはではなく奥に向かって重なるため中央に密集している。それに対して《**階段を降りる裸体No.2**》では、像の重なりは横へと拡散することで幅を持ち、全体的に**No.1をクローズアップ**で捉えたような構成にすることで、階段と人物の接点が大きくなり一体化を実現している。手すりがほとんど消滅する一方で、画面右上と左下に崩れそうな段が残ることでなんとか螺旋階段であることが理解できる。



### ○ 連続写真と運動表現・・・さ

て、マイブリッジの連続写真とマレーのクロノフォトグラフは、被写体が動くことで生じる形状の変化を連続的に記録しているという点は同じであるが、その記録結果としての写真の様態が大きく異なる。マイブリッジは、複数のカメラを用いて、被写体がカメラの正面に来た瞬間にシャッターが降りる仕組みで撮影を行なった。結果的に、一枚の写真には運動中の被写体の一瞬のポーズが静止画像として記録され、その写真を並べると**被写体が動いている様子がイメージできる**ようになるというものである。

## ②-1・レディメイドを発明する

1911(24歳)~1916年(29歳)

### ありふれた工業製品をアートにする

○レディメイドとは何か?・・・レディメイドとは、「既製品」を意味する英語である。デュシャンは1913年頃26歳から既製品を用いた作品の制作を開始し、1915年28歳にそれを「レディメイド」という英語の名称で呼ぶことに決めた。このレディメイドは、のちに「オブジェ」(既製の立体物をもとに制作される立体作品)への展開のきっかけのひとつとなり、絵画や彫刻といった伝統的なジャンルに収まらない現代アートの表現の出発点として大きな影響力を持つことになった。



マルセル・デュシャン(自転車の車輪)1913/1964年

○「レディメイド」とはいったいどういうものであったのか。レディメイドは、デュシャンが残した足跡の中で最もよく知られていることだと思われる。これまで最も頻繁に論じられてきたものであるし、最も俗説にまみれたものでもある。レディメイドは、既製品が作家の手による改変を経ずに作品として提示されるため、誰もが自分流に解釈することができるし、誰もが似たようなことができるし、なんでもレディメイドにできてしまう。誰でも好き勝手にレディメイドごっこもレディメイド語りもできてしまうのだ。



瓶乾燥器 1914年・27歳



マルセル・デュシャン  
秘めた音と共に1916年29歳

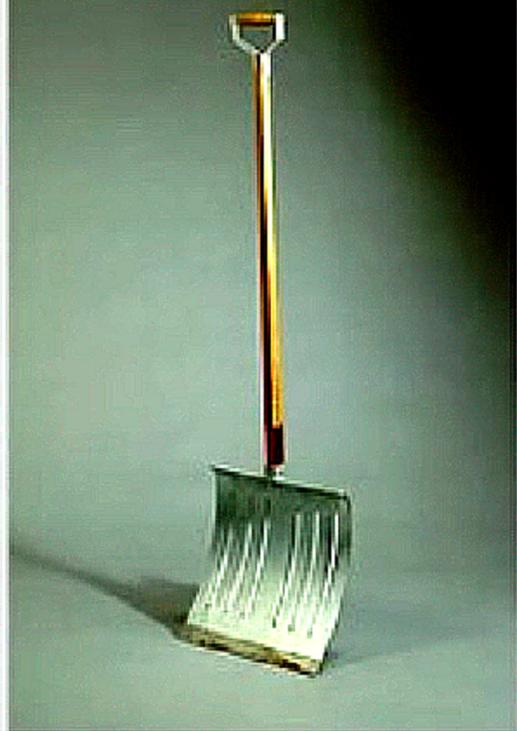
## ②-2・レディメイドを発明する

1911(24歳)~1919年(32歳)

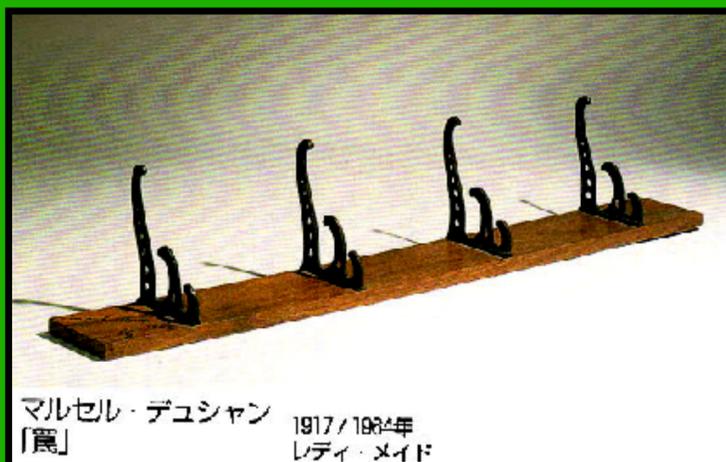
### ありふれた工業製品

○1913年から21年までの8年間に選んだレディメイドの数々である。

台所用スツールと自転車（《自転車の車輪》）、風景画の印刷物（薬局）、瓶乾燥器、シャベル（《折れた腕の前に》）、犬用櫛、麻紐玉と真鍮プレートとボルト（《秘めた音とともに》）、タイプライター・カバー（《旅行者用折りたたみ品》）、エナメル塗料缶の蓋（エナメルを塗られたアポリネール）、男性用小便器（《泉》）、コート掛け（《罨》）、帽子掛け、水浴帽（《旅行用彫刻》）、教科書（《不幸なレディメイド》）、モナ・リザの複製画（《L.H.O.O.Q.》）、薬品アンプル（《パリの空気、50cc》）、鳥かごと体温計、キューブ状の大理石、イカの骨（《ローズ・セラヴィよ、なぜくしゃみをしない？》）。



Marcel Duchamp,  
In Advance of the Broken Arm (1915)



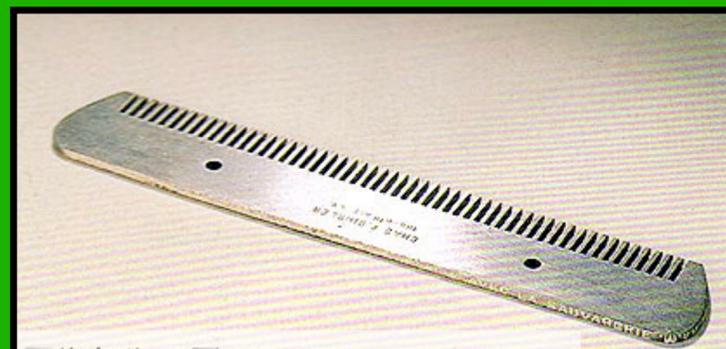
マルセル・デュシャン 1917/1964年  
レディ・メイド  
「罨」



マルセル・デュシャン 1917/1964年  
レディ・メイド  
「帽子掛け」



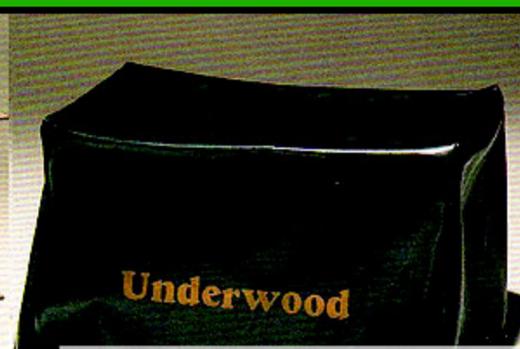
薬品アンプル(パリの空気50cc)1919年・32歳



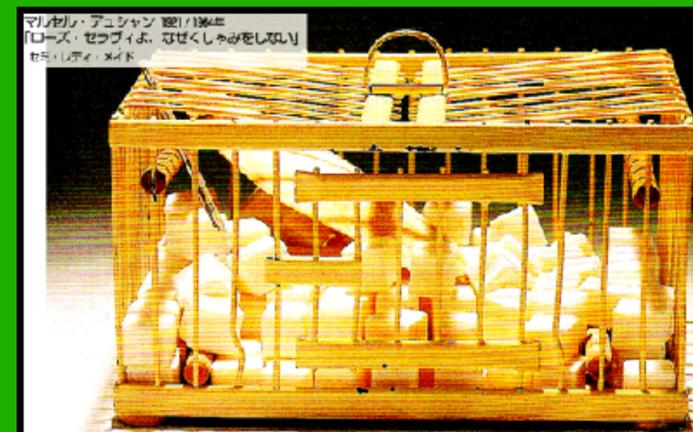
マルセル・デュシャン 1916/1964年  
レディ・メイド  
「櫛」



マルセル・デュシャン 1916/1964年  
レディ・メイド  
「秘めた音で」



マルセル・デュシャン 1916/1964年  
レディ・メイド  
「旅行者用折りたたみ品」

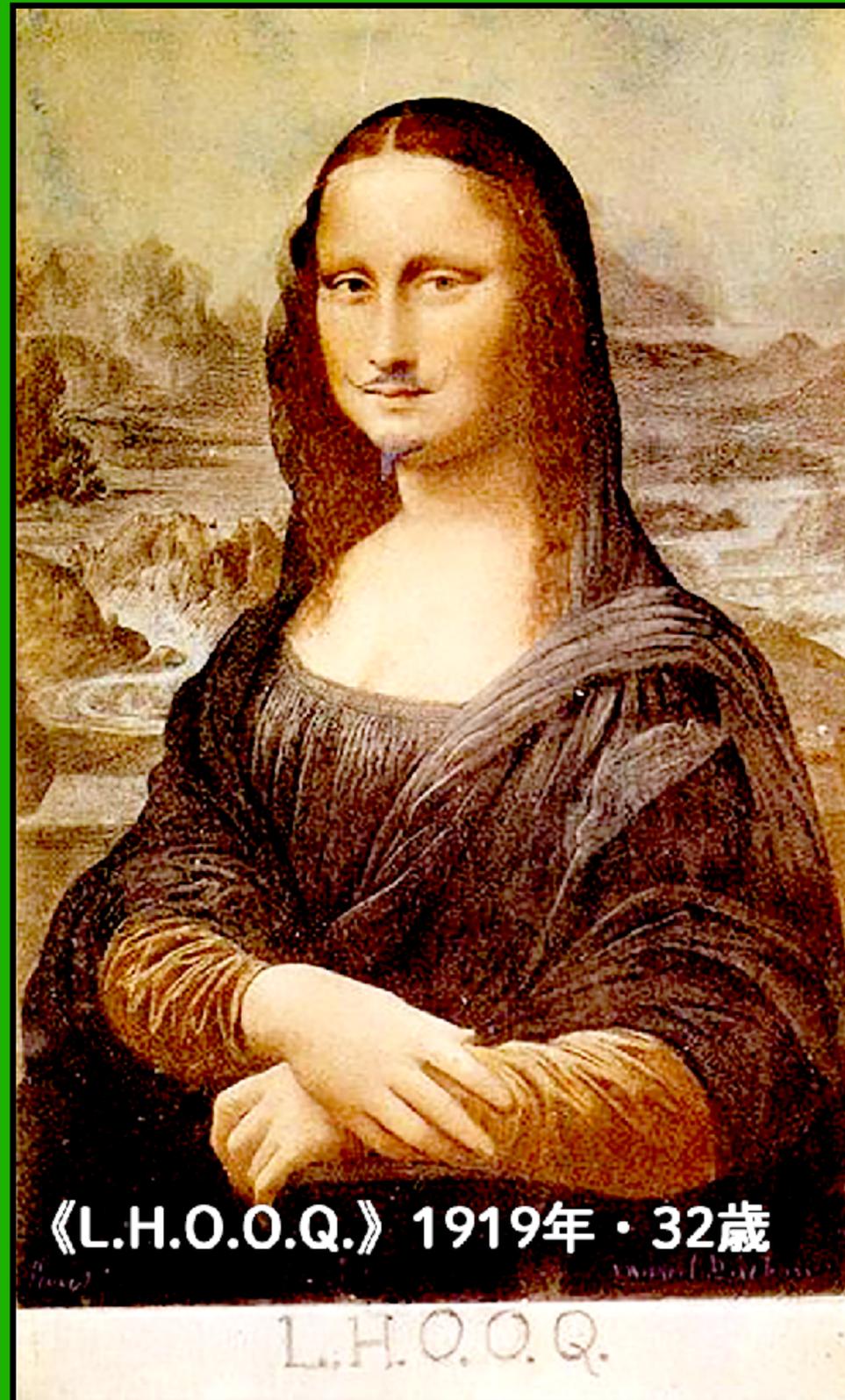


マルセル・デュシャン 1916/1964年  
「ローズ・セラヴィよ、なぜくしゃみをしない?」  
レディ・メイド

## ②-3・レディメイドの「反復可能性」

1917(30歳)~1919年(32歳)

○ 1911年にモナ・リザの名画がルーヴル美術館から盗まれ、2年後の1923年に犯人が逮捕、作品が美術館に戻ってきたという事件が起こる（詩人のギヨーム・アポリネールが共犯を疑われ逮捕・投獄されたがのちに釈放）。その「名画」を馬鹿にする行為にピカビアが大いに喜んで、自身が発行していた雑誌に作品を掲載したいとデュシャンに申し出る。掲載の承諾はデュシャンから得たものの、問題の作品が手元に届かなかったため、**ピカビアは新たにモナ・リザの複製画を購入し、自分で髭を付け足して図版を掲載、《L.H.O.O.Q.》というタイトルと「マルセル・デュシャンによるダダ・タブロー」というキャプションを添えて公表したのである。**つまり、初めて世に出た《L.H.O.O.Q.》は、ピカビアが描いた髭を持ったモナ・リザだった。



### 既製の価値を破壊する装置・ダダイズム

○ 「泉」を前提にしてレディメイドのことを考えたとき、最も一般的な説明として真っ先に挙げられるのがこのダダイズム型である。レディメイドを「反芸術」的な態度として解釈する方向のことだ。**《泉》だけでなく《L.H.O.O.Q.》**などもダダの代表例としてしばしば取り上げられるので、この角度からレディメイドやデュシャンのことを初めて知ったという人も多いであろう。

**「反芸術」的な態度とは、ヨーロッパで蓄積されてきたアートの伝統への「反発」あるいは「否定」を主眼とし、芸術のシステム（絵画や彫刻といったジャンル、油絵の具や大理石といった素材、歴史や神話といった主題、展覧会やアカデミーといった制度）を、作品制作を通して解体しようとする態度のことである。**

## ②-4・「泉」の伝説化

1917(30歳)~1919年(32歳)

○《泉》の登場1917年30歳・・・この「デュシャンの作品」という「希少性」をここまで高めることになったレディメイド作品についてきちんと確認しておかなければなるまい。1917年の『アメリカ独立美術家協会展』に「泉」というタイトルで出品しようとするも展示を拒否され、この決定への抗議文が出されたことで一躍有名になった男性用小便器のことである。《泉》登場の経緯は、それこそ**20世紀最大の問題作**であり、最も影響力の高かった作品と言われるだけのこともあって、さまざまところで繰り返し語られてきた。だが、実のところ「泉」登場（から消失）の経緯には謎が多い。「事実だと思われてきたことがかなり怪しい」ということが最近わかってきた、と言ったほうがいいだろうか。《泉》の「オリジナル」は現存していない。写真に撮られたあと忽然とその姿を消している。



○6ドルを払えばどんなアーティストでも作品を展示できるという。リチャード・マット氏は《泉》を送った。しかしなんの相談もなく、この作品は姿を消し、決して展示されることはなかった。マット氏の《泉》は何を根拠に出品が拒否されたのか。

1. ある者は、《泉》は不道徳で、卑俗だと主張した。
2. 別の者は、《泉》は剽窃(ひょうせつ・他人の著作物やアイデアを、あたかも自分のもののように発表する行為)にすぎず、ただの水回り品だと主張した。

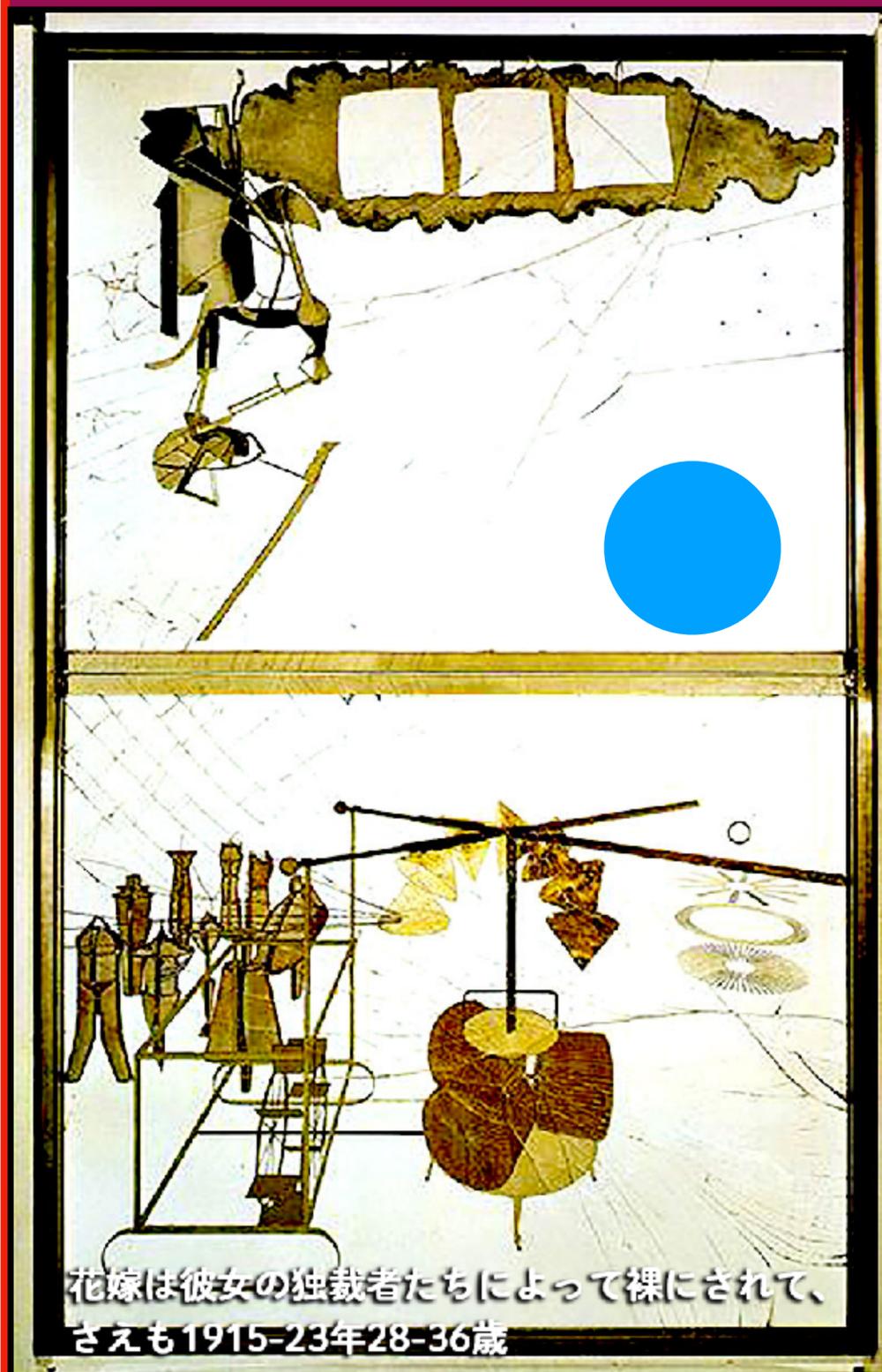
さて、マット氏の《泉》は不道徳ではない。浴槽が不道徳ではないのと同じであって、こんなことはばかばかしい議論である。水回り品を売る店のショー・ウィンドウで日々目にする**住宅設備のひとつ**である。マット氏が自らの手である《泉》を作ったかどうかは重要ではない。彼はそれを選んだのだ。彼は平凡な日用品を取り出し、新しい題名と観点の下に置くことで、**本来もっている実用的な意味が消えるようにしむけた**。つまり、あの物体に対して新しい思考を作り出したのだ。排水設備だったとしても、だから何だと言うのだ。

# ③-1・「花嫁」と「独身者」

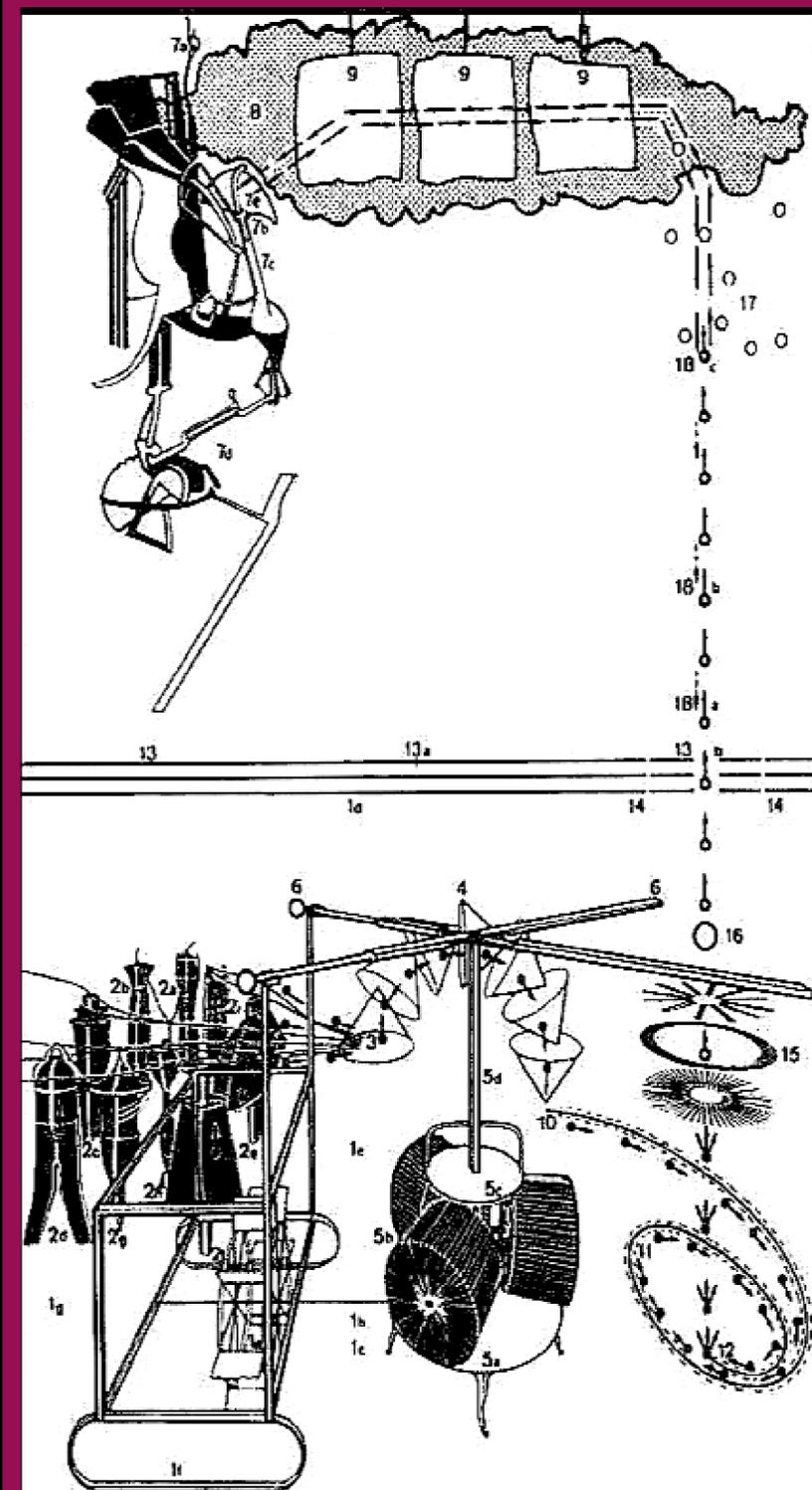
# 大ガラス-1

1915(28歳)~1923年(36歳)

○マルセル・デュシャン「大ガラス」・・・  
 「彼女の独身者によって裸にされた花嫁さえも」(いわゆる：大ガラス)は、1915年-1923年の8年の制作期間にわたって制作されたマルセル・デュシャンの**未完成のオブジェ**である。この作品は、鉛の箔、ヒューズ線、埃などの素材と2つのガラスパネルを使って制作されたものであり、偶然の要素(ヒビや塵)、透視図法、繊細なまでの職人芸的な技術や物理学、言語学的な要素が集約された非常に複雑な作品と言われる。大ガラス-未完のまま、チェスに転向したといわれるデュシャンだが、彼にとって、そのチェスは\*造形的理論問題の原点であったといわれる。そして、それには、多様な解釈がある。デュシャンは、**私たちが「男」または「女」として、社会から記号化された存在と考えた**。そして、「大ガラス」は、私たちが「男」または「女」といういずれかの性の記号を背負うことによって、相互に疎外される存在であることを表現している。デュシャンの「大ガラス」は、**「男」「女」の欲望のメカニズム**を、永遠に隔てられ、交わることのない位相の運動体化されているといわれる。



花嫁は彼女の独裁者たちによって裸にされて、  
 さえも1915-23年28-36歳



Key to the Large Glass  
 (including elements not  
 executed):

- 1 Chariot or Sleigh
  - (a) Water-mill wheel
  - (b) Pinion
  - (c) Trap-door to basement
  - (d) Pulley
  - (e) Revolution of the bottle of Bénédicteine
- (f) Runners
- (g) Sandow
- 2 Nine Malle Moulds/Cemetery of Uniforms and Liveries
  - (a) Priest
  - (b) Delivery boy
  - (c) Gendarme
  - (d) Cavalryman
  - (e) Policeman
  - (f) Undertaker
  - (g) Servant/Flunky
  - (h) Busboy/Water's assistant
  - (i) Station-master
- 3 Capillary Tubes
- 4 Sleeves or Parasols
- 5 Chocolate Grinder
  - (a) Louis XV chassis
  - (b) Rollers
  - (c) Necktie
  - (d) Bayonet
- 6 Scissors
- 7 The Bride/Pendu femelle
  - (a) Suspension ring
  - (b) Mortice joint
  - (c) Stem
  - (d) Wasp
- 8 Milky Way
- 9 Drought Pistons
- 10 Region of Butterfly Pump
- 11 Toboggan or Planes/Slopes of flow
- 12 Crashes or Splashes
- 13 Horizon/Bride's garment
  - (a) Vanishing point of perspective
  - (b) Region of "Wilson-Lincoln" effect
- 14 Boxing Match
- 15 Oculist Witnesses
- 16 Magnifying glass
- 17 Nine Shots
- 18 Handler of Gravity
  - (a) Trivet
  - (b) Rod
  - (c) Weight

↔ path of Illuminating Gas  
 → Bride's instructions

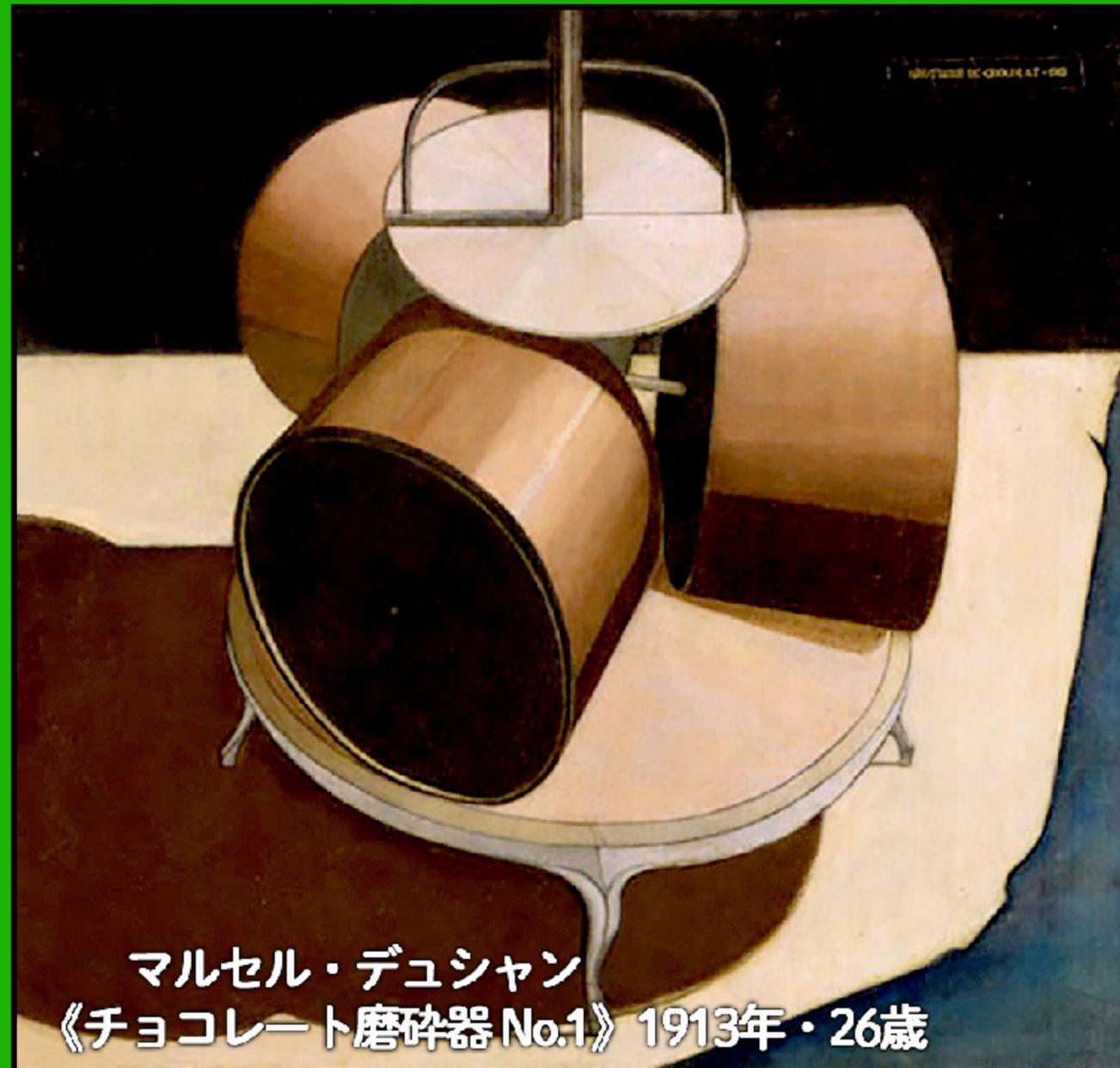
After Jean Siquet, *Mirair de la Mariée* (Flanmarion).

## ③-2・「独身者たちの機械装置」

1913年(26歳)

○. 《チョコレート磨砕器》は、1913年にマルセル・デュシャンによって制作された油彩作品。《大ガラス》の下半分の「独身者」の中央に描かれている《チョコレート磨砕器》の最初の作品。

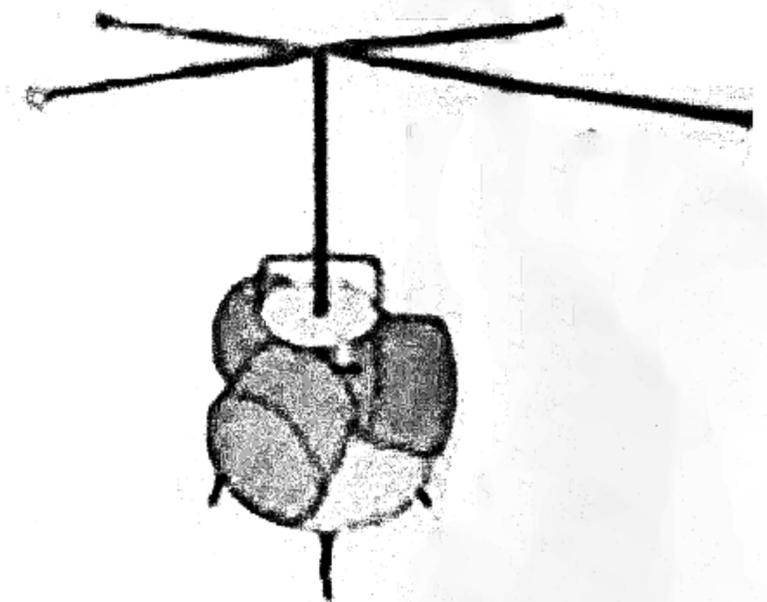
デュシャンはルーアンのカルム街にあるチョコレート屋のウィンドウで、このチョコレート磨砕器を見て、突然、インスピレーションを感じて制作しはじめる。チョコレート磨砕器の**ドラムの回転**する光景に魅了されたという。はじめのスケッチには、右側にモーターがあり、主軸にギヤが付けられているが、本作ではそれらは取りのぞかれている。台座はルイ15世様式の脚だが、これはおそらくデュシャンの誇りのようなものを象徴している。磨砕器の上に設置されている円形のものは、古風な円形ネクタイで、主軸は男根とみてよい。



マルセル・デュシャン  
《チョコレート磨砕器No.1》1913年・26歳



「濾過器」  
エッチング  
イメージサイズ：17.6×13.0cm  
紙サイズ：41.9×50.2cm

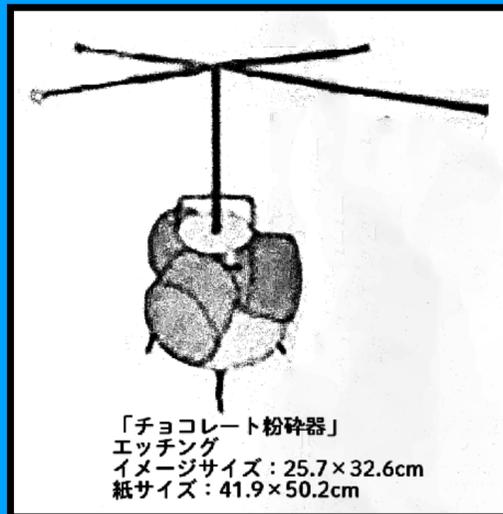
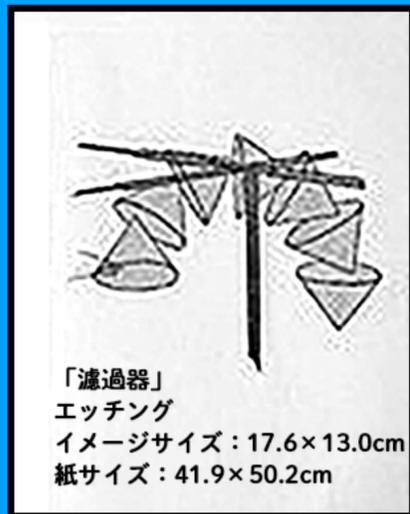
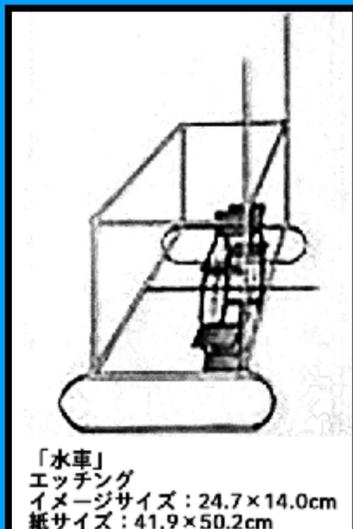
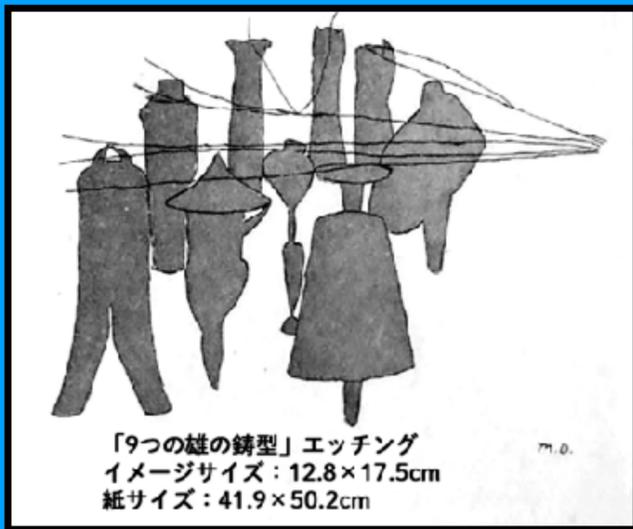
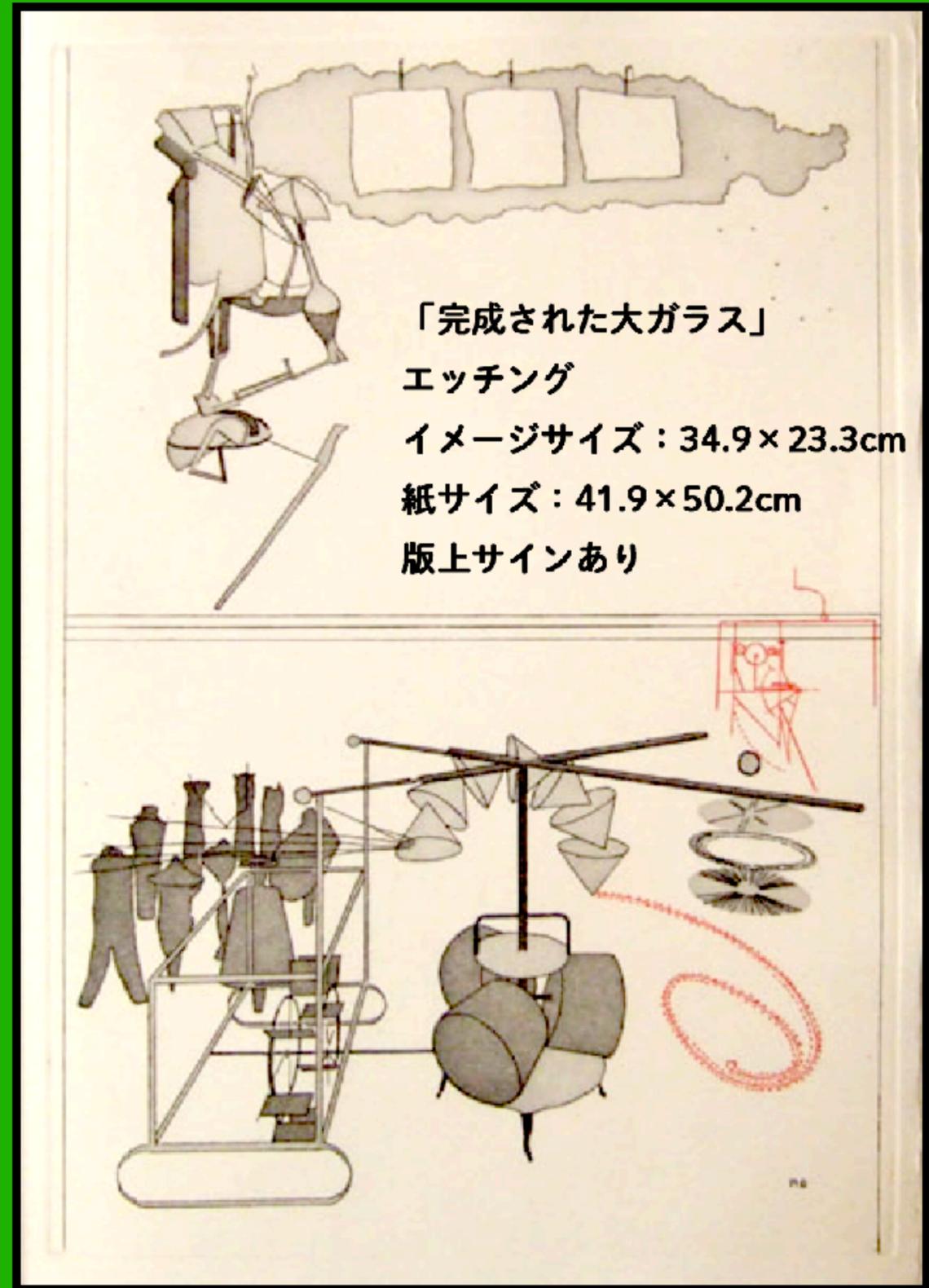
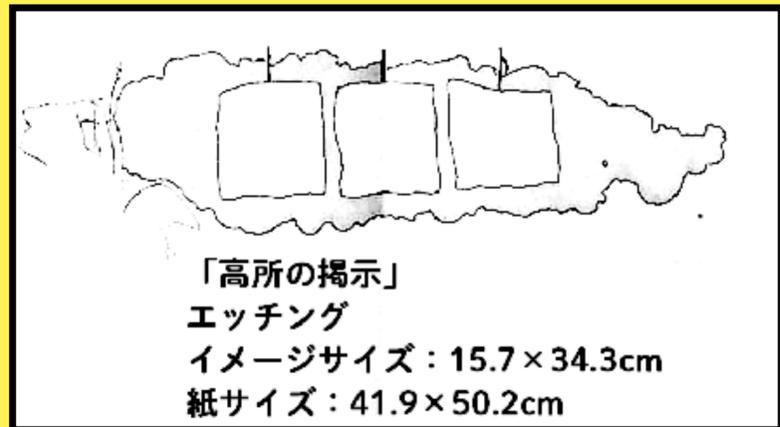
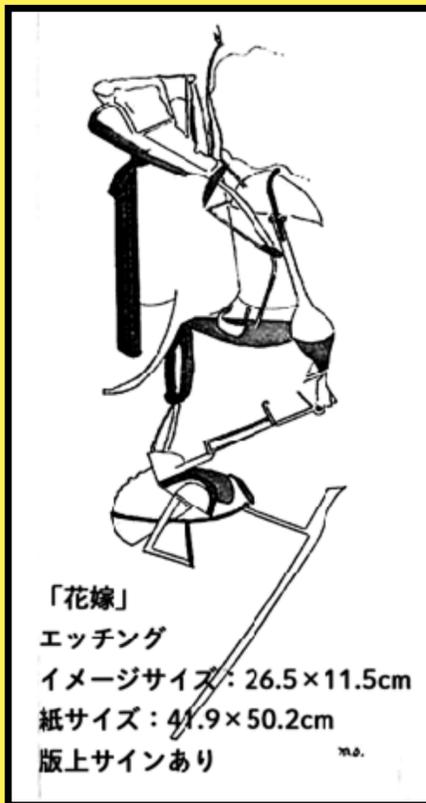


「チョコレート粉砕器」  
エッチング  
イメージサイズ：25.7×32.6cm  
紙サイズ：41.9×50.2cm

# 大ガラスのパーツ

## ③-3・「花嫁」と「独身者」

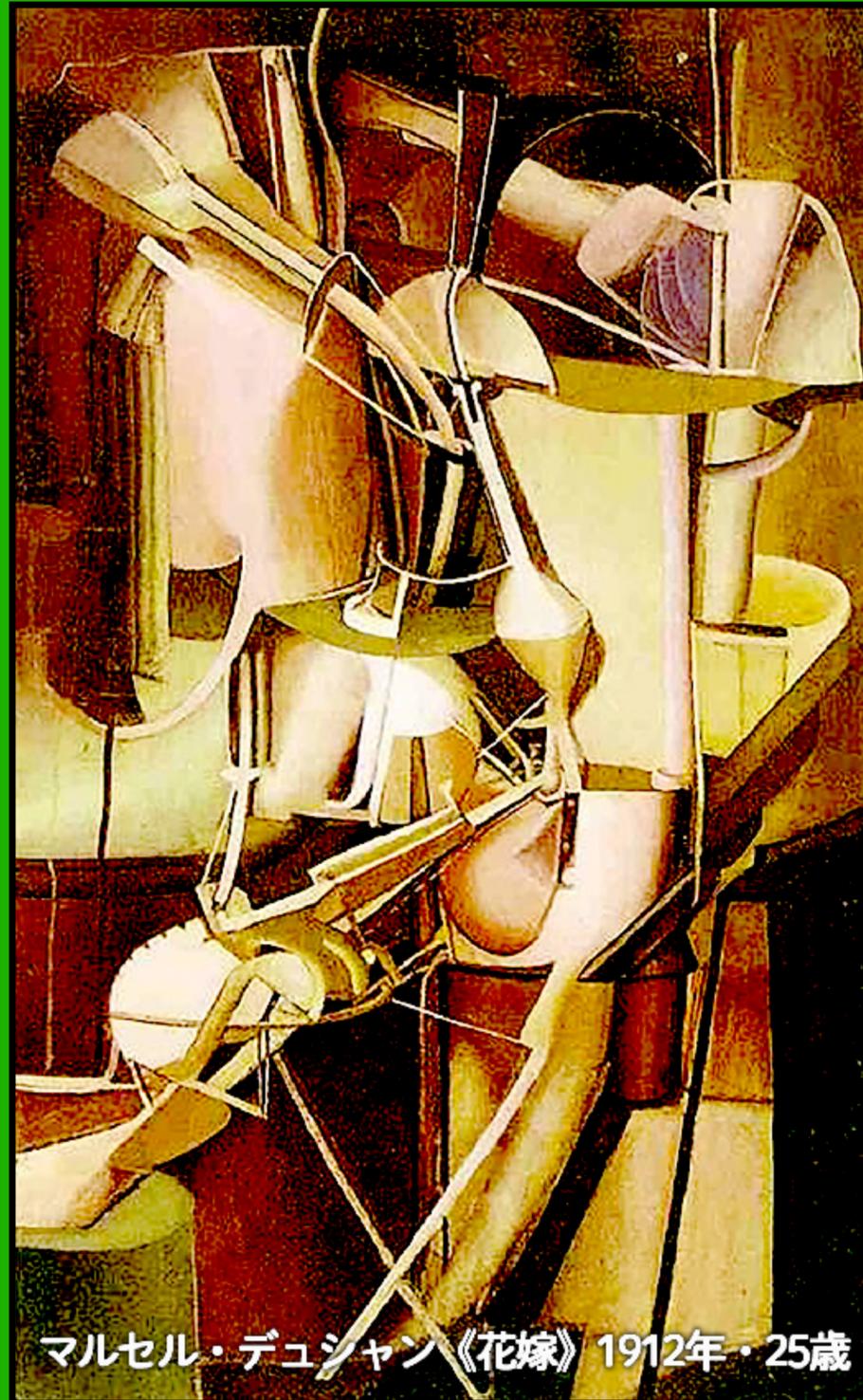
1915(28歳)~1923年(36歳)



### ③-4・「機械に置き換えられた花嫁」

1915(28歳)~1923年(36歳)

- 《花嫁》は1912年にマルセル・デュシャンによって制作された油彩作品。ミュンヘンに2ヶ月間滞在していた時期に描かれた作品群《処女 No.1》《処女 No.2》《処女から花嫁への移行》《花嫁》《飛行機》の1つに当たる。
- 《花嫁》では、これまでのように《ヌード、汽車の中の悲しげな青年》や《階段を降りる裸体 No.2》のような運動の変化を表示する線は表れない。《花嫁》では代わりに機械的要素と内臓的フォルムで描かれ、複雑に組み立てられたアンドロイドのようである。つまり、デュシャンは「花嫁」を機械に置き換えた。



### ③-5・「機械に置き換えられた花嫁」

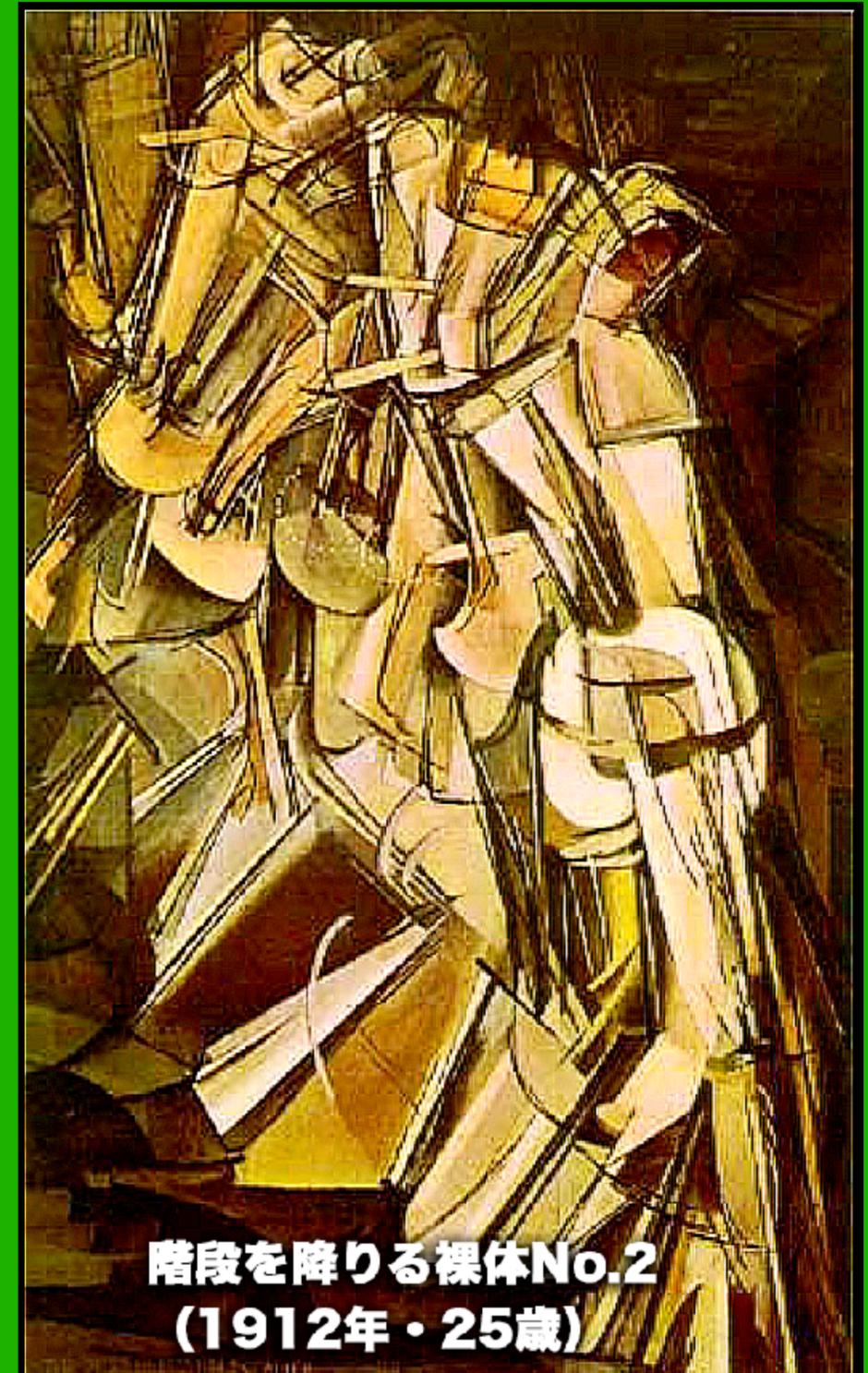
1915(28歳)~1923年(36歳)

○ 処女から花嫁への移行 純粹芸術からエロティシズムへの移行

○ 《処女から花嫁への移行》は、1912年25歳にマルセル・デュシャンによって制作された油彩作品。《階段を降りる裸体No.2》と《花嫁》の間の時期に描かれた作品で、ミュンヘンに2ヶ月間滞在していた時期に描かれた作品群《処女No.1》《処女No.2》《処女から花嫁への移行》《花嫁》《飛行機》の1つに当たる。本作では、それまでデュシャンが基盤としていた**キュビズム**や運動の変化を表現する線が消え、それまでと違った視点を取り入れようとしている。その違った視点とは、この後の《大ガラス》をはじめ、デュシャンの作品に頻繁に現れはじめる**機械的要素**である。**肉体を機械のオブジェとしてとらえはじめた移行期の作品**である。



マルセル・デュシャン  
「処女から花嫁への移行」(1912年) 25歳



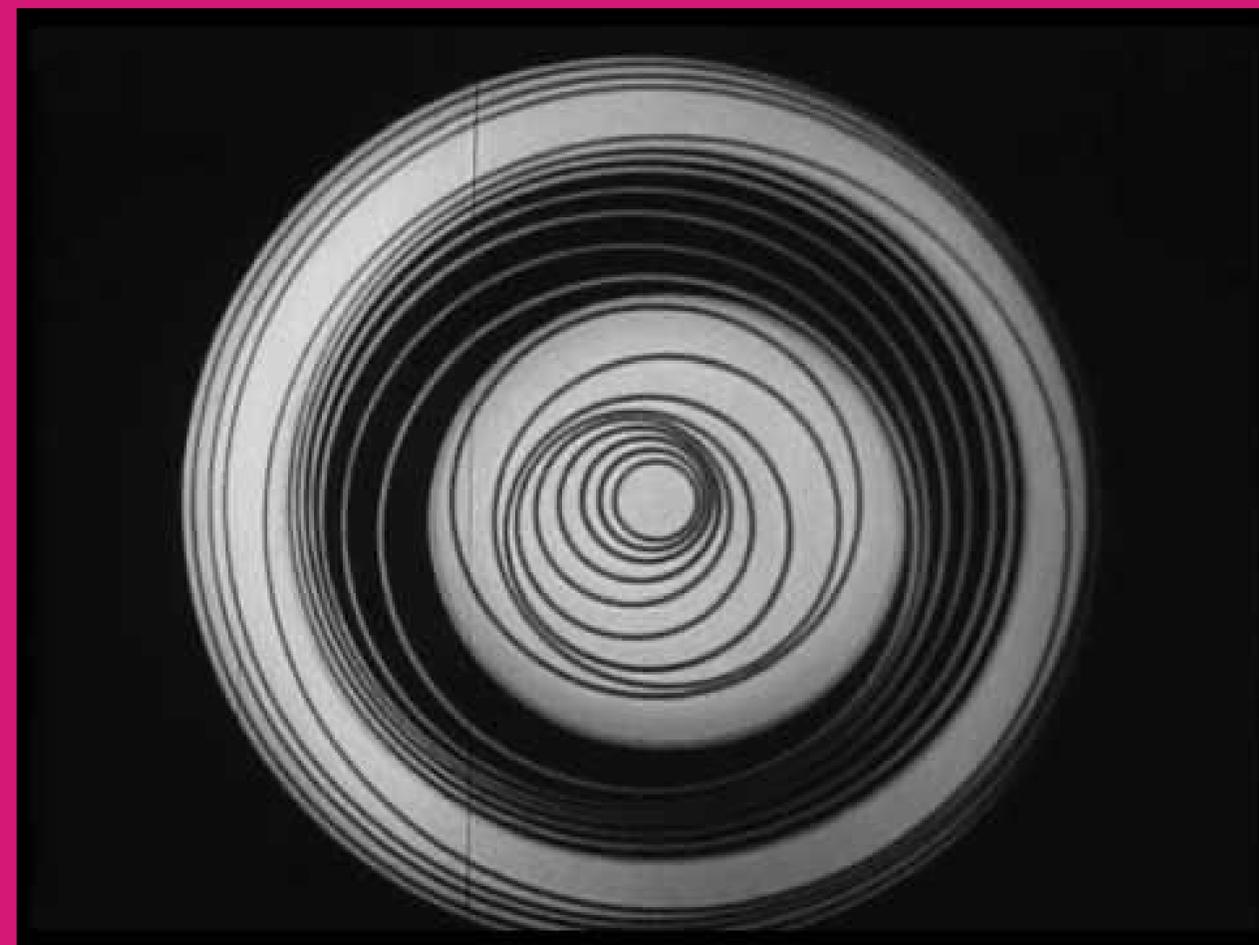
階段を降りる裸体No.2  
(1912年・25歳)

## ④-1・アニメミック・シネマの制作

1926(39歳)~1936年(49歳)

○《アニメミックシネマ》は1926年にマルセル・デュシャンによって制作された実験映像。マン・レイが撮影協力をしている。《ロトレーフ》と呼ばれるデュシャンのドローイング作品を回転させたアニメーションで、10枚の「螺旋のある円盤」と9枚の「地口を書いた円盤」が、交互にひとつずつゆっくり回りながら映し出される。「**地口(じぐち・・成句と似た発音の文句を作って言うしゃれ)**を書いた円盤」の方には「**ローズ・セラヴィ**」に収められたような語呂合わせが、ひとつずつ螺旋を描いて書き込まれている。題名のアニメミックシネマ

(Anemic Cinema) は、反対から読んでも同じように聞こえ、一見、**回分(前から読んでも後ろから読んでも同じになる言葉や文章)**のようなアナグラムによる言葉遊びがされている。**視覚的な錯覚と言語的な錯覚をひとつに組み合わせた作品**である。



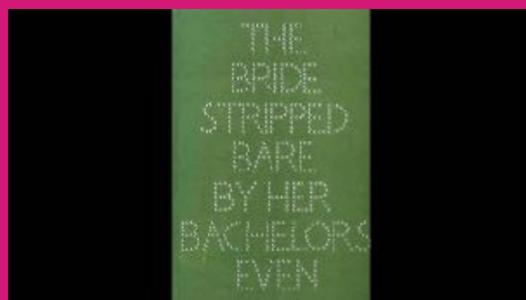
○マルセル・デュシャン、マン・レイとマルク・アレグレによる共同制作した映像。本作はデュシャンとデュシャンの兄の元を訪れた際に**自転車の螺旋のところを撮影した**という。「**anemic**」とは貧血症の意とともに「**cinema**」の綴りを逆にしたような言葉でもある(厳密には「**n**」と「**m**」をさらに逆にする必要がある)。渦巻き模様や語呂合わせ、格言風の文字が描かれた円盤が交互に回り続けるという内容で、最後にローズ・セラヴィ(デュシャンが女装した架空の女性)のサインが映し出される。

## ④-2・グリーンボックス刊行

1934年(47歳)~1937年(50歳)

○デュシャンが『**グリーンボックス**』で伝えたかったのは、芸術は完成品だけでなく、**創造のプロセスそのものに価値**があるということです。また、バラバラのメモを一つの箱に集めることで、**全体像をつかむ喜びや、鑑賞者自身の視点で新たな解釈**を加える可能性を生み出しました。1934年9月・47歳、マルセル・デュシャンは、メモ集『彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さらに（グリーンボックス）』を出版しました。一見すると綴じられていない書籍ですが、その中には**芸術的なアイデアと創作の秘密**が詰まっています。デュシャンの作品『彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも』

（通称『大ガラス』）の制作に関わるスケッチやメモ、写真など、94点もの資料が無造作に収められたメモ集なのです。緑色のスウェードで覆われた書籍型の箱には、**1911年24歳から1920年33歳**にかけて書きためたデュシャンのメモが、綴じられることなくバラバラのまま収められています。綴じられず無秩序な形には意味がありました。



○デュシャンは、『大ガラス』をただの視覚的な美術作品にとどめず、それを生み出すまでの「**思考のプロセス**」も芸術の一部だと考えていました。そのため『大ガラス』の制作期間（パリとニューヨーク滞在中）におけるデュシャンの創造的思考のプロセスがメモから分かるようになっていきます。『グリーンボックス』に収められたメモは、それぞれが同じ表現概念の異なるパーツのようにして関係しています。それら**バラバラのメモを集めて全体に共通するコンセプトが浮かびあがる**ように見せることがこの作品のポイントです。



## ④-4・「遺作」の制作に着手

1946年(59歳)~1968年(81歳)

○ 《1.水の落下、2.照明用ガス、が与えられたとせよ》はマルセル・デュシャンによるオブジェ作品。通称《遺作》。1946年から66年まで、ニューヨークの14番ストリートのアトリエでひそかに作りつづけ、フィラデルフィア美術館に寄贈する旨の遺言を残したまま亡くなり、死後、公開された。デュシャンの生前にこの作品の存在を知らされていたのは、ティニー夫人、義理の息子のポール・マティス、画家でコレクターのウィリアム・コプリーである。《遺作》が展示されている部屋に入ると、壁にアーチ状の古い木の扉が設置されている。扉の左側には小さな窓があるが塞がれているのぞけない。しかし扉の目の高さぐらいに小さな2つの穴があり、穴を覗くと作品が見える。扉の先に見えるのは、まず第一に、裂け目の走る煉瓦の壁、そしてその裂け目を通して、ひろびろと開けた空間。そしてかなり離れた向こう側に顔を隠された「裸の少女」がひとり、薪のようなものの上に体を伸ばし、両脚を広げて寝そべっている。裸の少女の手には小さなガスランプが握られている。裸の少女の後方には、木の生い茂る山並み、緑と赤みがかかった色、下へくだると、小さな湖、その湖にかすかにかかる霞、そして滝が見える。なお、鑑賞者の視覚からは見えないようになっているが、床はチェスボードの模様になっている。



「扉」1946~66年・59歳~79歳

## ④-5・「遺作」の制作に着手

1946年(59歳)~1968年(81歳)

○ 《1.水の落下、2.照明用ガス、が与えられたとせよ》は題名の《1.水の落下、2.照明用ガス、が与えられたとせよ》は、《グリーンボックス》の2つのメモに見出すことができる。入り口を閉ざす煉瓦と扉は、実際にスペインのある納屋で使われていたレディ・メイドであり、デュシャンの窓やドア系作品の系譜にあるものである。背景の森と湖の風景は、写真に加工したもので《L.H.O.O.Q》の修正レディメイド作品の系譜にあたる。水を落としている滝は、穴のあいた金属板と照明効果による視覚的トリックである。ほかにもさまざまな過去のデュシャン作品の系譜に連なるものがある。

題名の《1.水の落下、  
2.照明用ガス、が  
与えられたとせよ》

裸体のモデルとなっているのは、1946年から1951年までデュシャンの恋人だったブラジル人のマリアン・マルティンスと2番目の妻のティニー夫人。



## ④-6・「権威で固めた近代芸術への反逆」 (アメリカ、生まれはフランス)

○中年以降のデュシャンは絵筆を手放して**図書館司書**になった。結果、画商が良い条件を示しても、絵を描こうとはしなかった。かわりに適度な収入で生活を楽しむ道を選んだ。それは1915年、ニューヨークに移住したのちも続いた。

たとえば彼が選んだのは**1時間2ドルのフランス語教師**として1日2、3時間だけ働いたり、6か月で破産する小さな染色店を開いたり、なかば冗談で「**歯科用貸付信託共同会社**」の小切手を振り出したり、**両親が死亡すると、その遺産で可能な範囲の生活に甘んじたり**……。

そのかたわらで彼は**チェス競技に耽溺し始める**。で、ついに芸術作品の制作そのものをやめるに至る。かわりにチェスの**全ヨーロッパ国際選手権大会で名勝負**を残すほどの実力を示した。

その後**1927年には富裕なアメリカ女性メアリー・レイノルズ (1891~1950) と結婚する**。彼女は、アメリカの芸術家にして製本業者で、ナチス占領中のパリではレジスタンス運動の支持者としても活動した。ただ、チェスにかまけるデュシャンとは6か月で離婚することになった。

が、その後もデュシャンとメアリー・レイノルズは、**1950年における彼女の死まで「どんな結婚より幸福だ」と**いわれたほど親密に親交した。

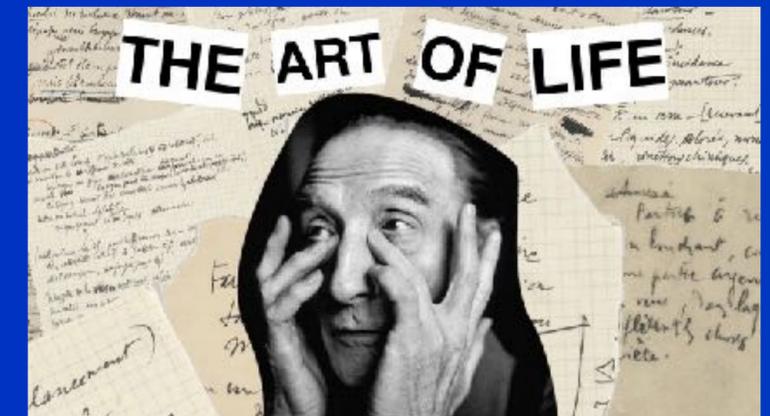
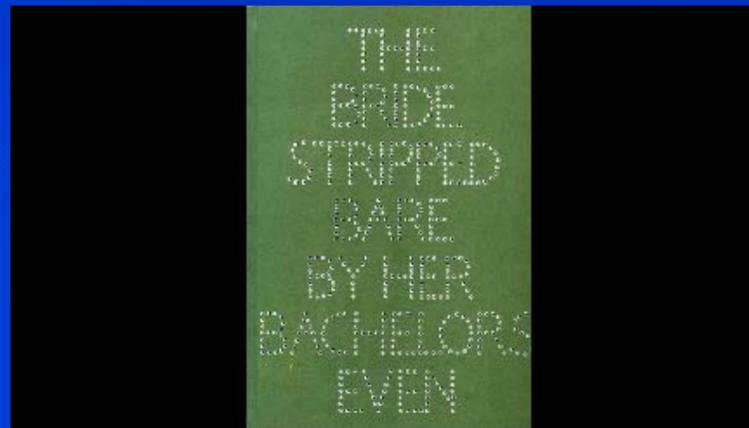
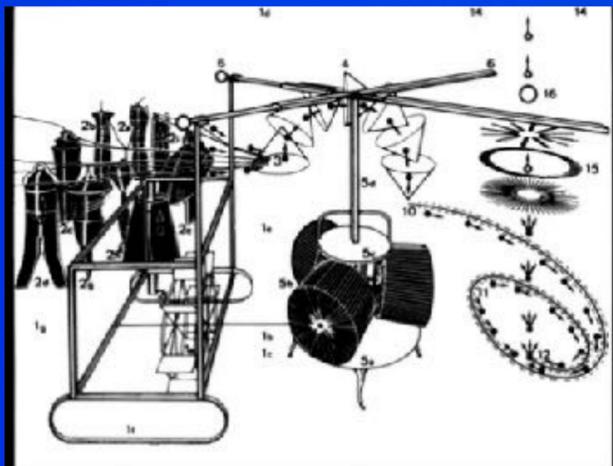
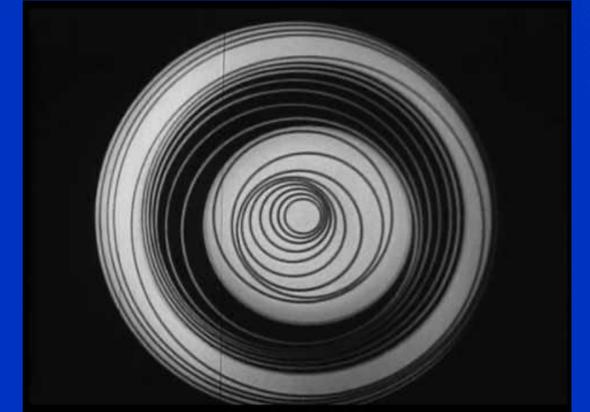
その4年後にデュシャンは**アレキシナ・サットラー**と再婚して静かで穏やかな余生を送ったという。

パリ近郊のアパートにて逝去・**1968年(81歳)**



写真：遺作「与えられたとせよ 1. 落ちる水 2. 照明用ガス」

# YOUTUBE



## ○ 本日のテーマ

「美術史を根本から破壊した男・マルセル=デュシャン  
とは何者か?」です。

どうでしたか。ご感想お聞かせください。

○ 今後のテーマのご要望を承りますので、忌憚なくお  
話してください。

○ また次回お会いできますこと、楽しみにしてい  
ます。